

人妻輪姦す...へ
そして



新たな者
人妻陵辱(閑話)



人妻陵辱 閑話 『 新たなる陵辱者 』

ロッカーの中の写真

会社の更衣室にある閉じっぱなしになっていたロッカー、その前に立って俺は、ぶつくさと文句を垂れ流す。

「ちっ、めんどくせえな……」

元々、このロッカーを使用していたのは、同じ部署に勤めている同僚であったが、数ヶ月前から長期入院しており、結局はそのまま病院で亡くなってしまい、そのままとなっていたロッカーだ。

俺も会社の同僚と言つ事で葬儀に出たが、一人暮らして身寄りもいなかったらしく、簡単な葬儀と共に、奴はこの世から消えてなくなった。

本当なら、葬儀の前に奴が使っていたロッカーの中を整理して、ロッカーの中に放り込まれたままであった奴の私物などを、処分しなければ駄目だったのだが、忙しさにかまけてそのままとなっていた。さすがに何時までもそのまま放置しておく訳にも行かず、たまたま俺が今週のロッカールーム掃除当番であった事もあり、閉めっ放しになっていた奴のロッカーの整理をする役目を上役から仰せつかった………実に面倒くさい事この上も無い事だ。

2

合鍵を使用してロッカーを開けるが、中にはたいした物が入っているわけでもない、タオルやらスリッパ、その他のゴミのような私物が入っているだけだった。

そんなロッカーの中身を俺は、念の為にと用意してきた段ボール箱に移し、中を掃除しながら片付けている最中に、そんなゴミの中に俺は一枚の写真を見つけ出した。

何の写真だろうと手に取り、その写真に写し出されている画像を確認した瞬間、俺はその写真をポケットに仕舞い込む。そしてロッカーの片付けもそのままにして便所へと向かった。

便所の中の個室、周囲に誰も居るはずが無い個室の中で、俺は再度その狭い空間に誰も居ない事を確認してから、ポケットに突っ込んだ写真を取り出して見た。

あいつのロッカーの中にあつた写真、それは裸の女が写し出されている写真であつた。しかも普通の裸の写真ではない、明らかに激しい凌辱の痕を身体に刻み込まれ、呆然とした表情を浮かべている女の姿が写し出されている写真だ。

「じっや……」

思わず飲み込む唾が、喉に引っかかるのが解る。美しい顔立ちの女だが、美人と言つよりは、可愛い



と言つ表現の方が似合つタイプ、その女が写真の中で焦点の定まらない視線を漂わせながら、裸に剥かれた身体を曝け出し横たわっている。

乱れた髪が顔にかかり張り付いている……汚れた顔に男の体液を付着させ、半開きとなっている口元からも同様の液が垂れ出しており、引き裂かれボロボロになっている服と下着からは、乳房が露出し剥き出しとなっている。

下半身の方も同様に剥ぎ取られ、剥き出しとされている下半身には、凌辱の痕跡を読み取る事が出来た。

そんな無残な姿を写真の中に曝している女　だが、その女は美しかった。

凌辱されていても美しいのか、それとも凌辱されているから美しいのか　それを確認する事は出来ないが、俺は写真の中の女に対して猛烈な欲望を……激しい性欲を感じ押さえる事が出来なくなり、その写真を見ながら自分の男根を刺激し、欲望を吐き出した……止め処もなく、2回……3回と……

何度かの自慰を終えた後に、ようやく落ち着きを取り戻した俺は、その写真の女の姿をもう一度見る……再び膨らみだしてくる下半身の疼きを押さえながら、呆然とし汚れた顔の　だが堪らなく美しい女を見る。

少なくとも、会社の中に居る女ではない……まるで見覚えの無い女の顔だった。

僥倖

ロッカーの中にあつたのは、この写真だけであり、ダンボールに移した奴の私物を、念入りに漁って見たが、他には何もなかった。

「奴は、どこでこんな写真……女をモノにしたんだ？」

写真の持ち主であつた奴の事を思い起す……それほど人付き合いの良い奴では無かつたし、俺もそんなに親しかつたわけでもない、せいぜい会社の同僚としての付き合いが多少あつた程度で、何回か話した程度で、特に付き合いがあつた事も無く、一緒に酒を飲んだという記憶もない……

奴のロッカーに入っていた「ゴミを調べなおしたが、手掛かりになりそうな代物も見つからない、それとなく会社の連中に奴の事を聞いてみたが、俺と似たり寄つたりの付き合いしかなく、参考になる事は何も無かつた。

「無駄な努力か……」

「この写真の女を諦める気はないが、この先探し回つたとしても見つけ出す事は不可能だろう……そつ

思い始めた時に偶然の奇跡が引き起こされた。

取引先の会社に行った時、偶然からその会社の社員と話をする機会があった。そして話している最中に、その会社員と写真を持っていた奴が知り合いだと言つ事を知る。

何かが心の片隅に引つかかる……そして俺は、その会社員と一緒に酒を飲む機会をつくつた。酒好きだが、基本的に酒に弱い体質らしい、それに二人目の子供が生まれたので、飲むのを控えていたと言つ事もあつてか、久しぶりの酒の席で、酔いに呂律を回しながら、ポケットから生まれたばかりだと言つ娘の写真を取り出し、俺に見せる……他人の子供の写真など、見せられた方にとっては迷惑なだけだが、付き合いと云つ事で差し出された写真を見た時に、俺は神に感謝をした！

たとえ、その神が曲りくねった角を生やし、先の尖った尻尾を持つている邪悪な神であり、俺の魂を要求したとしてもだ。見せられた写真に写っている赤ん坊……それを抱きながら、優しい微笑を見せて入る母親らしき女性は、間違いなく俺が、ロッカーの中で見つけ出した写真の中で、陵辱された肢体を横たわらせていた女であつた。

俺がもっている写真の中で、犯された直後の呆然とした表情と、見せられた写真の中で優しげに微笑んでいる表情では、比べようが無いかもしれないが、間違いなく同一人物だと確信した。

俺は、その男と別れた後に密かに男の後を尾行する……酒に酔っている男に、尾行を気づかれる事もなく、郊外の建売住宅地にある男の家の場所を確認する事に成功し、密かに壁に張り付きながら、家に入つて行く男の姿を見ていた時に、玄關まで迎えに出てきた女の姿を確認できた。

視力2.0を誇る俺の視力に感謝する……

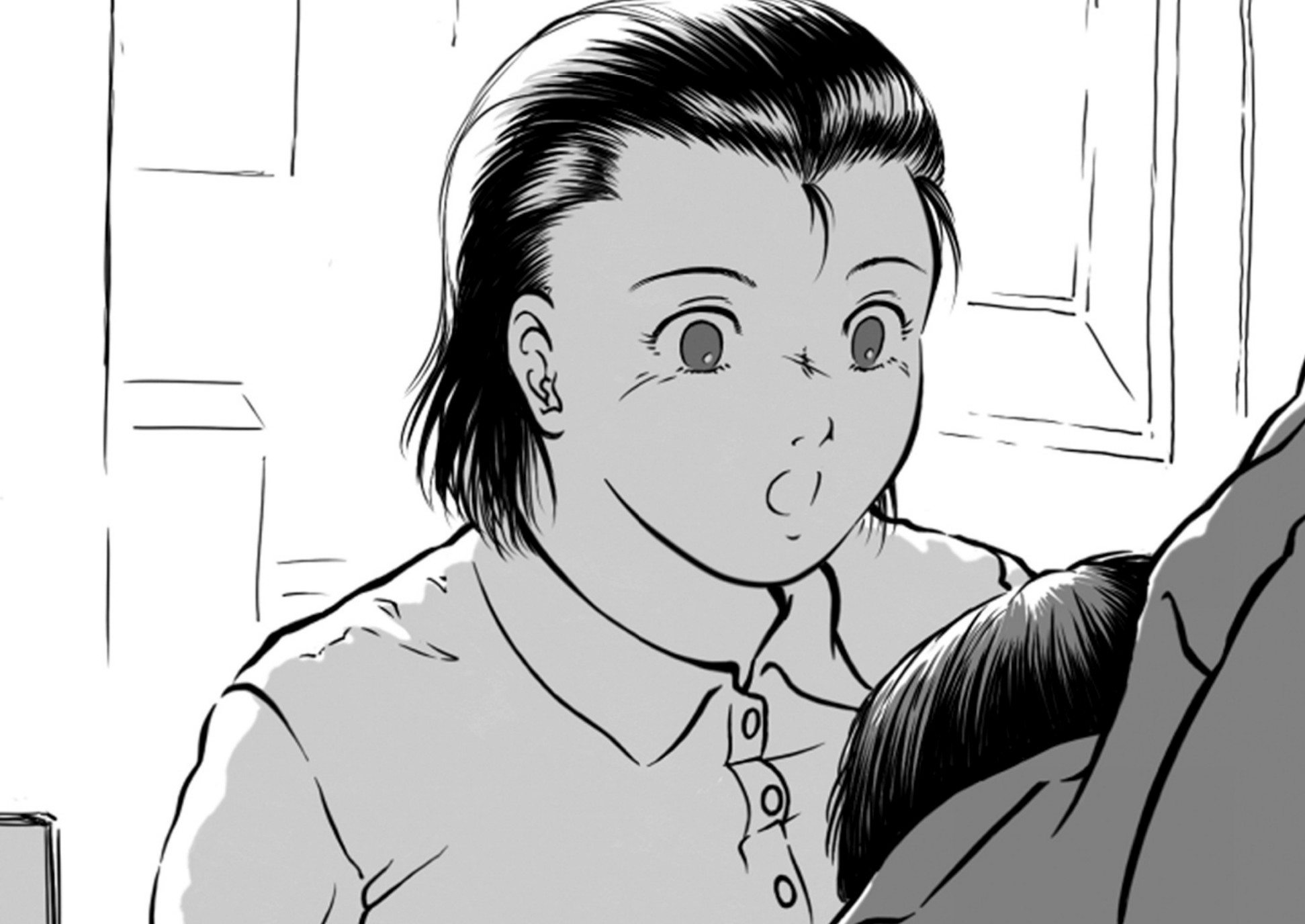
感謝しながら、女の姿を確認し……そして確認する。間違いなく写真の中の女であり、その女が動いていた。

それは、ほんの数秒の事だったが、スポンの中で膨らんだ俺の男根は、その女の姿を見た瞬間に大量の精液を下着の中に吐き出した。

俺は染み込んでくる自分が吐き出した精液の、嫌な感覚を気にすることも無く、壁に張り付いたまま満ちるべく欲望の口々を想像し、再び大量の精液を吐き出した。

手持ちの武器？ は、俺が持っている女が凌辱された直後の写真が一枚(無論の事、コピーをしたり、スキャンしたのを無数に増やす事は出来るが)、そしてこの事実を俺は知っているが、女は知らないと言つ事……今すべてでも、この写真をネタにして旦那が留守をしている最中に、家へと上がり込んで脅迫すれば、一回や二回は欲望を満足させる事は容易だろう。

だが俺は、一度や二度で満足するつもりは無い、俺が知っている二つの事実を利用して、この女を長く……出来るなら永遠に俺の肉奴隷と化する計画を、俺は逸る心を抑えながら、じつくりと張り巡らして行く事にした。



女の旦那である男と、時々会っては情報を仕入れて行く……この写真を取った奴の事や、女を含めた家庭の事、ただし探っている事を女に悟られない様に、女と顔をあわせるような事はしない。そして、最初に写真を見つけ出してから、2ヶ月もの時間が過ぎ去った時に俺は、この女を犯す計画を実行し始めた。

最初にした事は、女が陵辱されている写真を郵便で郵送する事だった。

赤ん坊を生んで間もない女は、一日の大半を家の中で赤ん坊と一緒に過ごしている。昼間に仕事へと出かけている旦那が、郵送した郵便を見る可能性はまず無い、最初に郵便を受け取って中を見るのは女だけの筈だ。

(無論、宛名は女の名前である)【永嶋律子】として、差出人の名前は、この写真の持ち主であった男の名前にしておいた)

郵送して数日後、様子を見るために旦那を誘って、一緒に酒を飲みながら話題を振りながら探りを入れていく。相変わらず旦那は何も知らない……ただ奥さんの様子が、少し不安定なようだと言わす。

育児疲れだろうと話をおわせながら、俺は旦那に見られない様にしながら、邪悪な笑みを浮かべ予定通りに事が進んでいるのを確信した。

そして次には電話をかける……電話口に出た女に俺は言う。

『奥さん、写真見たかい?』

電話口の向こうで息を呑むと言つか、呻くような声が聞え沈黙が続く……その後、震えるような声で問う声が聞えてくる。

『あ……あなた誰なんです。この写真を……どう言ってもりなんですか……』

初めて聞く女の声……その震えるような声は、俺の想像通りの……いや、想像していたよりも遙に素晴らしい声であった。

その声を聞くだけ、思わず行ってしまいそうになる自分を抑えながら、俺は冷静を装いながら言う。

『簡単ですよ奥さん、写真の続きをしたいただけなんです。あの男のようにな。』

電話口の向こうから漏れ聞える引き攣ったような声、それで計画の第一段階が成功した事を俺は確信する。

話の主導権は俺が握る事に成功する……不安を与えながら、女の口から彼女と男の関係を探り出し、新たな情報を得ながら会話を続けて行く。そして電話を切る直前に言う。

『誰かに相談するなんて事はしない方が賢明ですよ……相談なんかしたら、あなたの生んだ赤ん坊が、旦那の子供でない事がばれますよ。』

これは半分以上は張ったりであった。

だが今までに調べた事や、今日の電話の会話から得た女と男の関係の情報、そして俺の直感が、この言葉を言わせた。



『……』

電話口の向「つ側の驚きが手に取りよつにわかる……そして、俺が言ったことが事実である事を確信する。

『それじゃ……』

電話を切る俺、受話器の向「つでは、何か叫ぶような声が聞えるが、それを無視して俺は完全に電話を切る。

そして湧き上がって繰る欲望を吐き出す為に、近くにある公衆便所へと向かった。

その後、数回に渡って電話のみので連絡を取った末に、女の家へと出向く事となる。

当初は、どこが適当な場所にも呼び出す事を考えたが、まだ乳飲み子を抱えている身では外出も思つよつに出来ず、また出来たとしても赤ん坊を連れと言つ目立つ姿は、何かと拙い事が引き起こされる可能性もあり、結果として女の家へと出向く事にした。

欲望を満たす刻

9

玄関の鍵は掛かっていなかった。

開けて置く様にと俺が指示をしたからだが、素直に従つたと言つ事は、既に覚悟を決めたと言つ事だろつと、俺は勝手に考えながら玄関を開けて、家の中へ入る……そして玄関口で家の中へと声をかける。

「奥さん、待たせましたね」

その声に誘われる様にして、家の奥の方からふらふらと、夢遊病者の感で人影が出て来て、俺の前に立ち止まった。

蒼田となつて顔が、微かに震えているのも見て取れる……それでも、その顔は美しかった。

子供を産んだばかりと言つ事もあるのだろうが、優しげな中にも母親の表情が見て取れ、家庭を守らなければと言つ悲壮な決意すら読み取れる。

そんな女の方へと俺は手を伸ばす。

「ひいー」

驚えたよつに身を引く女だが、それよりも素早く俺は腕を掴み、逆に引き寄せせる。

「覚悟は出来ているんだろ、楽しもうぜ奥さん……あいつの時のよつにな」

女の腕を掴みながら、引きずる様に家の中へと俺は、ズカズカと上がり込む。

「待ってください、勝手に家の中に入らないでください！」

引きずられる腕を振り解こうと足掻く女……だがその抵抗が、逆に俺の欲望を掻き立て、一層の欲情を誘つ。

「それじゃ、外で犯るかい？ 誰かに見られてもいいなら、俺は構わないぜ」

俺の言葉に、女は沈黙し、そのまま足掻きながらも俺に引きずられて行く……そして家の中に完全に俺は入り込んだ。

家の中……グルリと周囲を見渡しながら、場所の確認をする……どつやら居間らしい……

俺は、置かれているソファの上に、ドカリと座り込むと、女を前の方に跪かせる。

「あつっ……つっっ……」

怯え……涙を浮かべ……俺の慈悲をどつかのよつに、すがりつく様な腫で俺を見る女の表情は、逆に俺の嗜虐心を激しく刺激する。

「さて、まずはこれから始めてもらおうかなっ」

そんな女の姿を見ながら、俺はズボンの前を開き、剥き出しにした下半身を女の眼前に曝し、既に硬く勃起しているペニスを突きつける。

「そんな……」

突き付けたペニスが、一体何を意味するのか、それを理解した女であったが、その理解した行為を始める事無く、突き付けられているペニスから目を逸らせ、嗚咽を漏らし泣き始める。

「ちっ！ 旦那のモノだけじゃなくて、散々他の奴の奴も啜え込んでたんだろ！ いまさら嫌がる事がよー！ 背けた顔を強引に捻りながら、半開きにさせた口の中へとペニスを捻じ込む！

「んぐいひぐっっっ……」

呻くようなくもった声を漏らしながら、女は俺のペニスを口の中へと受け入れる。

「慣れたもんじゃねえか、いったい何人のチンポを啜え込んできたんだ？ なあ……奥さんっ」

「うっ、うっぐっうんっ、んっああっ……」

俺の音が聞こえたのか、ペニスを啜え込んだまま、呻くような舌足の声を漏らす女の口、その奥深くへと俺は、さらにペニスを突き込みつつける。痙攣するかのよつに、ブルブルと顔を歪めながら、それでも俺のペニスを啜え、震えながら漏れ出させる女の呻くような声……それを聞きながら、俺はペニスをしゃぶらせ続ける。

「ああぐっ、ぐっ……おおっうっ！ んっあああ、んっぶおっっ……」

喉の奥まで突き込まれている俺のペニス、苦しげな呻き声を、僅かな隙間から漏れ出させ続けながら、抵抗もせずに受け入れる女……

(慣れていやる……犯される事……)

俺は確信する……この女は、犯される事に……男にされる事を拒めなくなっているよ、よほど奴に仕込まれたのか、それとも元々の気質なのかは不明だが、最高の女だと俺は確信した。

「ほら、もっとう舌を使ってしゃぶれ、散々に舐めしゃぶってたんだろ？ 嬉しそうな声を出しやがって、この牝犬が……」



口の中に何度も突き込み、しゃぶらせ続けているペニス。その扱くような快感と快樂……舌を使えと命令すれば、言われるままに舌を使い、突き込んでいるペニス舌を纏わりつかせ、包み込みようにして口全体を使って囓り舐める。

「うおおー」

思わず声が漏れる……女の口蓋に触れるペニスの感触、絡みつくような舌の蠢き、喉の奥底にまで俺のペニスを受け入れ、まるで全部飲み込もうとする様に囓りしゃぶる……下手な風俗女も裸足で逃げ出す様な技巧……俺は、堪らず射精してしまっ。

「おっっー」

まるで俺の方が、この女に犯されててもいるような声を出し、欲望の濁液を女の口の中へと吐き出し、その全てを飲み込ませた。

取り敢えず一発目は、口に出すつもりだった。

すぐに押し倒して、強引にでも俺のちんぽを捻じ込んで、欲望のままに犯してやりたかったが、押し倒している最中に耐え切れず、挿入前に射精してしまっのではないか……と言っ、滑稽とも言える恐れを抱いていたからだ。それはある意味正しかったかも知れない、強引に口の中へとペニスを突っ込みしゃぶらせながら数回動かし、しゃぶらせているペニスに女の舌が纏わりつき、舐めしゃぶった瞬間に抑えようとする俺の意思を無視して欲望がほとばしったからだ。

「最高の口だったよ……奥さん……」

多少の余裕を見せながらも俺は考える……いくらなんでも短時間の間に、そう何回も出せるわけではない……無駄に出したくは無い、どうせなら残りの全ては、この女の中に注ぎ込んでやりたかった。

口から引き抜いたペニスは、うな垂れる事もせず硬くなったままであった。すぐに続きを始められる……そう感じた俺は、女をその場に押し倒し着ている服を剥く様にして脱がし始めた。

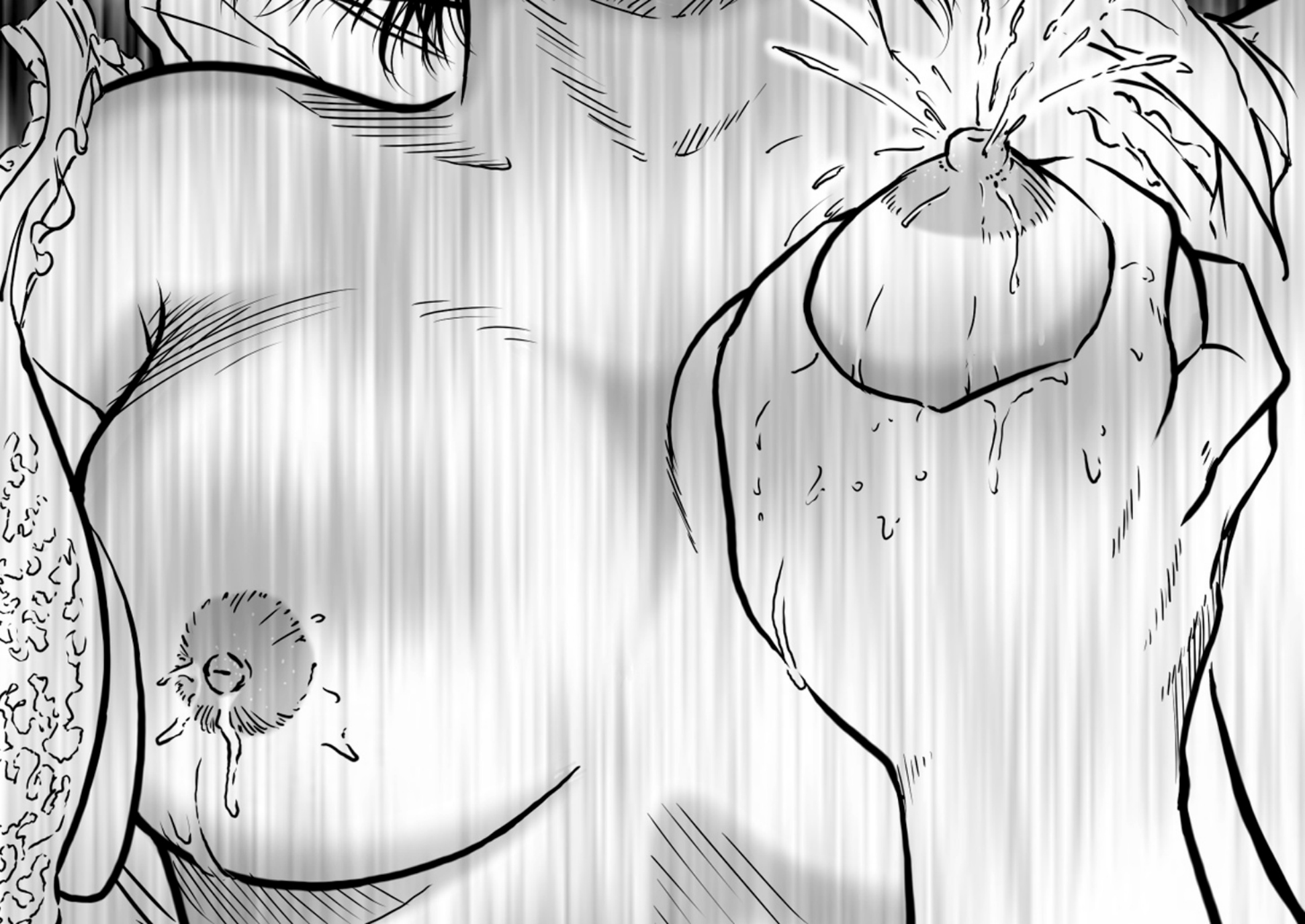
「おねがい、やめてください……おねが……あぁー」

服を脱がされながら、弱々しい哀願の言葉を吐き出し、脱がされて行く服を必死に抑え抵抗する女だったが、その抗いは弱々しく抵抗の意味をなさない……抵抗している女も知っているのだ。既に全てが手遅れであり、無駄だという事を……だが、それでも女は抗いを続け哀願の声を絞り出す。

俺はその声に欲情する……無駄だと知りつつも、それしか出来ない女を犯す快感を味わいながら……
「はぁひー」

ブラウスの前を強引に押し上げると、ブラウスのボタンが跳ね飛び、その下に隠されていた下着が露となる……ブラジャーの上からでも分かる豊満で柔らかそうな乳房……俺は、その下着も強引に剥き取る……ブツン！ という音と共に、剥き取ったブラジャーの下から丸く白い物が転げだし下に落ちた。『こりゃなんだ？』

丸く白いパット状の物体……最初は何なのか解らなかったが、転がり落ちた物体の匂いを嗅いだ時……その微かな甘いような芳香に気づいて、これが何であるか気がつく……そっだ……この女は、出産した



ばかりなのだ……。

「こりゃ、乳漏れを防ぐ奴だな……そうだよな、子供を産んだばかりだもんな、もっと誰のガキかは解らないが」

その言葉に、今までは違つ表情で俺のほつを見た女は、叫ぶように言つ。

「あの娘は、夫の子供です！ 私と夫の子供なんです！」

悲痛な女の叫び！

俺は確信する……電話口で言つた事……

『……あなたの生んだ赤ん坊が、旦那の子供でない事がばれますよ……』

それが事実を言い当てていたのだと言つ事を……俺は笑みを浮かべる……たぶん今まで誰にも見せた事の無い邪悪な笑みを……そしてその邪悪な笑みを浮かべたまま、剥き出しとなっている女の乳房を思いつ切り揉む！

「くっ、あつっ……」

俺の手で握り潰される乳房、そして指の間に挟みこんみ、勃起し尖つた乳首の先端から、白い母乳が勢いよく迸り、俺の手と女の肌を濡らす。

乳房のうえ……肌のうえ……腹のうえ……女の上に垂れる白い母乳……俺は、飛び散つた母乳を舌で舐め上げ、そのまま乳首を噛むように含んだ。

「ひゅー……」

グビリと俺は喉を鳴らす……微かに甘く感じる程度の甘味……それがサラリと俺の口の中に広がる……

……俺は乳首に唇を押し当てながら、溢れ出して来る母乳を音立てながら飲み始めた。

「いやっ……やめてえ……やめてえ……」

俺に吸われ、飲まれて行く母乳……実際には、音を立てて飲むほど大量の母乳が、出ている訳ではないが、俺はわざと音を立てながら、染み出すように出て来る母乳を飲み続ける。

甘味はそれほど無い、それどころか微かな塩味を感じる……なつとりと言つよりは、サラサラとした舌触りで溶けるように消えて行く触感……食感……それが喉の奥へと流れ込んで来るのは、俺にとって痺れるような快感を覚えさせてくれる。

犯されると言つ行為よりも、赤ん坊の為の大切な母乳を飲まれると言つ事の方が、女にとっては恐怖であり、耐えられない出来事なのかも知れない、それゆえに女の抵抗はいつそう激しくなり、その抵抗を味わつ為に俺は、いつそう強く女の乳を吸い続けると言つ行為を続けた。

無論の事、乳を吸っているだけではなく、手を轟かせながら女の着ている服を脱がし、スカートをずり下ろしながら下着も脱がして行く

「っっっっ……やめてええ、おねがい……おねがいします」

髒られていく女……胸は揉まれながら、同時に母乳を搾り出され飲まれ続け、脱がされ剥きたしとなつた肉体も犯して行く……

(じろあいか……)



俺は、乳首から唇を離し立ち上がると、途中まで下ろしていたスポンを完全に脱ぎ捨て、剥き出しにしたペニスを女の眼前に再び突きつける。

「いやああ……やめて、おねがい、よしてええ……」

呻くような弱々しい哀願を漏らす女の姿、それに俺は満足感……いや征服感を感じながら、笑みを浮かべながら、じつくりと眺め……そして女の上に覆い被さっていった。

「あつ……」

前技などしなくても、女のアソコは十分に濡れており、俺のペニスを拒むどころか、逆に吸いつく様に全てを受け入れる。

「あつ……ああああ……いやああ……」

足掻き……抗い……口では拒み続けている女だったが、その実は俺のペニスを受け入れ、その拒絶の動きすら、逆に俺に快感を与えてくれる。

「そんなに俺の……男のモノが好きかなのか……」

俺は身体を密着させながら、更に女の肉体の奥深くへとペニスを突き込ませながら、その乳房を揉み、母乳を噴出させる。

「あつ、だめえ、むねをもんじゃだめえ！ だめええ！」

母乳に汚れた乳房へと、俺は舌を這いまわらせ、溢れ出た母乳を音を立てながら嘍り、女の肉体を犯し続ける。

女の胎内で、俺の意思とは切りはなされ、まるで別の存在とし蠢くペニス……飲み込まれ……吸い付き……締め付け……貪りように蠢き始める女の肉体……

「いやっ！ いやああ……ああ……やあはあんっ……んっああー」

拒絶の声すら、何時の間にかしつとりとした喘ぎが混じり始めたとき、突然に女の動きが止まる。

「幸子……」

女が叫んだ名前、それは女が産んだ赤ん坊の名前であった。

「待つて！ 赤ちゃんが、御願い！ 赤ちゃんが！」

女に夢中になっており、まるで気がつかなかったが、どこからか赤ん坊の泣き声が聞こえている……女の赤ん坊か？ 抵抗が収まり、ぐったりとし始めた女が再び抵抗しだす……

「うるせえな、早く赤ん坊の所に行きたけりや、自分から腰でも振って協力しろよ、そうすりやすくに終わるぜー」

赤ん坊の事など知ったことか、俺の欲望の前には関係無い！ 再び俺は、激しくなって行く女の抵抗を押さえつけ、逆にその抵抗の動きを快感に変えながら、欲望の絶頂へと向かって女を犯し続ける。

「どいてー！ おねがいだから、どいてええー……」

どこかへと伸ばされる女の腕、その先には赤ん坊がいるのだろっ……俺は、その腕を押さえ込みながら、女の肉体を犯し続ける……そして赤ん坊の泣き声が響く中……俺は、女の胎内へと欲望の全てを吐き出した。



隠微なる空間

満足するまで……最後の一滴まで……欲望の濁液の全てを、女の胎内へと吐き出し切って、俺はようやくに女の肉体からヘニスを引き抜く

「あつ……あつ……」

横たわる女の呻き声を聞きながら、俺は一息つく……まだ終わりにするつもりはないが、まずは一休みという所たるうつか？

「あつ……あか……ちゃん……」

横たわっていた女が、よろめく様に律子が立ち上がる……いまだに泣いている赤ん坊の声に、誘われるように、ふらつきながら歩き出し、一階への階段を登って行く……股間から漏れ出した俺の精液を床に点々と垂れ出させながら……そして俺も、当然の様に女の後をついて行く……

這いずるように階段を上がり、部屋の中へと入って行く女……そして俺は、部屋の中を覗きこむ……「ごめんね……幸子……ごめんね……」

抱きしめた赤ん坊に、犯された姿のまま乳を与える女の姿……その姿に、俺の欲望が再び燃え上がり始める。

赤ん坊に乳を与える女……「クククと乳を吸う赤ん坊……その背後に俺は立つ……そして欲望の行動を起す。

「なに、やめて、いやっ!」

「大人しくしてろよ、そうすりゃすぐに終わるからな」

女の背後から俺は覆い被さる。赤ん坊に乳を含ませている女は、逃げる事も抵抗する事も出来ずに、そのままの姿勢で俺に再び犯され事となった。

俺は、背後から激しくバックスタイルで女を犯す。女は、いまだに乳を含ませ続けている赤ん坊を守る様に抱きしめながら、嗚咽を漏らす。

「いやっ、やめ、てくたさあいいい……あつべっ……」

欲望に身を任せ俺は女を犯す……そんな俺に犯されている母親の乳を、何も知らずに飲み続ける赤ん坊……そして赤ん坊を守るために、俺に犯され、耐え続ける女……それは現実離れた異様な空間であり、濃厚な陰臭が満ちる空間……その空間に俺と女は、身を置き続ける事となる……果てる事の無い、俺にとっては夢の様な空間が……女にとっては、悪夢の様な地獄の空間が……



快食 快眠 快便 そして……

美味しい飯を食つて生活に張りが出る。気持ち良く寝れば満足する。思いつきり出せば気持ちが良い。実に『快食快眠快便』と言つ奴だ。

それらが順調だと、余裕ができると言つか……実に豊かな気分になり、快適な生活を送る事が出来るものだ。

そしてそれ以上に良いのが、良い女を抱くと言つ事であり、それはある意味……美味しい飯を食つ以上に生活に張りが出て、気持ち良く寝るよりも満足し、思いつきり出すよりも気持ちが良い事であり、全てに置いて余裕が出来て、豊かな気分になり、快適な日々を送る事が出来る物だと俺は実感していた。それは偶然に手に入れた一枚の写真……それが俺にとっての幸運の始まりであつたが、その写真に写っている女にとっての不幸の始まりだつた。

その写真に映し出されていたのは、強姦された直後の無残と言つか凄惨な女の姿……だが良い女だつた。犯された直後の姿だと言つのに、とても美しく素晴らしい女であり、俺はその写真を見た直後に、何度も自慰をしてみつほどであつた。

(逆に言えば、犯された直後の姿であつたから、美しく素晴らしい女だと感じたのかもしれないが)そして俺は、努力と偶然と必然と運命によって女の正体……今年27歳になる永嶋律子と言つ名前の人妻であるという事を知る事が出来た。

永嶋律子……年齢は27歳、三つ年上の旦那と、幼稚園に通つ男の子、そして生後間もない女の子と言つ家族構成、身長161cm、体重54kg、バスト86cm、ウエスト62cm、ヒップ88cmの肉体は、子供を一人産んだ女の肉体とは思えないほどに張りがある美しくも美味な肉体だつた。(ちなみに身長体重などは、モノにした後でわざわざ俺が計測した数値だつたりする)

女の正体を知る事が出来た俺は、入手した写真を使って、その女をモノにする事が出来た。いま思い出しても、勃起したペニスの先から男汁が漏れ出しそつになる記憶……しゃぶらせて一発出した後に、さらに続けて膣内へと一発……そして最後にもう一発出して終らせた最初の交わり……その後は新たな脅迫の材料を入手する事によって、数日置きに女を犯す事が出来る様になり、最初に言つたように快適な生活を送る事が出来ていた。

そんな快適な生活を送り続ける俺であつたが、実生活において少し問題が生じ始めていた。

毎休みの会社の屋上、ポケットの中にしまいこんだ写真(新たに撮影した女の写真だ)の内容を思い出しながら、俺はニヤニヤと次の事(当然のようだが、永嶋律子をどの様に甚振るかを想像してい



た)などを考えていた。

「今度は、どんな真合に可愛がつてやるかな……ひひひ……」

そんな事を考えていた俺の肩に手が置かれ、不意に耳元で少し怒気のもった声が囁かれる。

「おい、そろそろ借金返してくれよな。いい加減にしてくれないと、怖い兄さんのところに話を持ち込むぜ」

振り返って見れば、職場の同僚である男の顔があった。

俺は、この男に少なくない額の借金をしている……麻雀、競馬、酒場のつけ……等と言った御定まりの借金ではあるが、さすがにそろそろ返済をしないと拙い事になりそう(実際に、この男はそれなりに怖い所に繋がりとあると言っ話だ)事になるのは、実感し始めていた。

だが拙い事に、いまの俺は返済する金など無い状態であったのだ。

俺は男の顔を見る……かなり怒っていると云う事は、口調や顔付きでわかる……もしも何時ものように……

『もっ少しだけ待ってくれよ……』

などと云えば、本当に借金の話を怖い兄さんの所に持って行きかねないだろう……俺は、男の顔を見ながら、何か良い言い訳の言葉が無いかを必死に考える。

そして必死に考えた末に、一つの妙案を思い出し、俺を睨み続けている男に言う。

「なあ、金の代わりに別の代物で、借金を返すのってのはどうだろう……」

俺の言葉を聞いた男の顔は、一瞬だけ奇妙な表情を見せたが、次の瞬間には興味深そうな表情へと変わり、聞き返してくる。

「ほ、別の代物ってのはなんだ……金目の代物かなんかか？」

俺は、ニヤリ……と笑みを浮かべて言う。

「ああ、とっても良いモノだよ……絶対におまえも満足する筈だ……これが、その代物だ……」

そっ言いながら、俺はポケットに仕舞い込んでいた写真を男に見せる。写真を見た男の顔が、驚きの表情に変化し……次には、好色な笑みを浮かべる……どうやら商談は成立したようだ。

「おまえだけじゃ何だ……人を集めてくれないか、これくらい良い女だったら、いくら金を出しても良いて奴は、結構居るだろう?」

好色の笑みを浮かべたまま、男は頷く……俺はこの時、アノ写真を見つげ出したと言っ幸運を神に感謝した……無論の事、頭に角を生やし、曲りくねった尻尾と蝙蝠の羽を持つてあるっ神様だ。

人妻陵辱シリーズ〜第二弾

『 人妻輪姦す（ひとつままわす） 』

テキスト文字数〜約31000文字

表紙・挿絵枚数〜二十二枚（カラー挿絵）

ネット声優の御方による収録テキストの朗読 約二時間以上

添付（おまけ）表紙・挿絵に使用した各画像を別途収録予定

挿絵〜

月工仮面 様

23

GUNSRYU 様

テキスト朗読〜

涼貴涼 様

テキスト〜

蛙雷

十二月下旬 ダウンロード開始予定

御期待の程を！